

〔提 言〕

家族支援専門看護師誕生から5年を迎えて

高知県立大学

長戸 和子

家族支援専門看護師が誕生して、今年で5年目を迎える。最初の家族支援専門看護師として認定を受けた3名の方々は、それぞれの場所でパイオニアとして、家族看護の意義を広く示す活動を展開している。彼らが家族支援専門看護師を目指して大学院に在籍していた頃は、家族支援専門看護師はもちろんのこと、ロールモデルとなる家族看護のスペシャリストもほとんどおらず、また、専門看護師そのものが臨床に浸透していない状況であった。そのような中、臨床の看護師や学生、教員がともに手探りでその専門性の確立や実践方法の開発、実践力の向上に取り組んできた。その後、現在までに新たに3大学院を加えて5大学院が家族支援専門看護師の教育課程として認められ、昨年の認定試験の合格者を含めると、家族支援専門看護師は合計14名となった。他領域の専門看護師の数と比較すると、まだまだ少数ではあるが、着実に増加しており、活躍が期待される。

家族看護は、現在の医療保健システムにおいて当然視され、あたりまえのように実践されている部分もある。しかし一方、家族の相互作用上や発達上の課題の有無などの判断の視点が普及しているとはいえず、家族看護介入の枠組みは発展途上にある(2010年日本家族看護学会戦略的研究プロジェクト活動報告書より)。このことは、専門領域や実践の場を問わず、事例検討会などにおいて臨床の看護師の方々からうかがう話からも感じられる。このような背景の中で、今後、家族支援専門看護師に期待される役割について、考えてみたい。

まず一つには、複雑な健康問題やそこから派生する困難な状況に直面している家族と、それらの家族

にかかわる看護師、その他の医療従事者への支援がある。医療の高度化・複雑化や患者・家族の権利擁護の重視、また家族規模の縮小や家族形態の変化による家族の脆弱化、在院期間の短縮化などにより、看護師が思い描くような家族ケアを実践することは難しく、家族とのかかわりにおいて焦燥感や不全感を抱く状況がある。このような場合に、家族への直接的なケア提供や、看護師、その他の医療従事者に対するコンサルテーション、多職種間の調整活動など、家族の課題の解決やケアの質向上に寄与する活動が期待される。これらは、現在すでに家族支援専門看護師の役割として認知されていることであろう。

もうひとつの役割として、家族の健康の保持・増進を主眼とした活動があげられると考える。医療経済の厳しさや高齢社会の進展などの背景から、国民が主体的に自らの健康を守り、自立した生活を営めるようにすることは、重要な政策課題でもある。医療費の抑制や在宅生活の継続という視点から考えると、継続的な受療を必要としないような軽微な身体的不調や慢性疾患の安定期にある人に対して、モニタリングや療養に関する教育などを行い、不要な、あるいは過剰な受診を避ける一次予防、二次予防としての活動が必要であろう。家族支援専門看護師は、個人の健康が家族全体に及ぼす影響、家族全体の生活が個人の健康に及ぼす影響を常に視野に入れながら対象をとらえており、家族員の相互作用を効果的に家族全体への働きかけに活用する方略をもっている。また、家族看護は、あらゆる看護領域、場で展開されるものであると言われる。このような強みや特性を生かして、家族支援専門看護師の役割や活動の範囲が広がっていくことを期待したい。